



# ピッツバーグとボストンに暮らして

第21回 堀 智織 (情報通信研究機構知識創成コミュニケーション研究センター音声言語コミュニケーショングループ)

## 1. はじめに

2004～2007年の3年間、アメリカのピッツバーグとボストンに滞在しました。最初の2年間はピッツバーグにあるカーネギーメロン大学(CMU)で研究員として働き、最後の1年間はマサチューセッツ工科大学(MIT)の客員研究員であった配偶者とともにボストンで主婦として暮らしました。言語の違い、文化的背景の違い、社会の仕組みの違い、生活習慣の違いを乗り越え、さまざまな国から集まった仲間と過ごした充実した3年間をご紹介します。

## 2. 渡米まで

筆者は、1999～2002年に東京工業大学古井貞熙教授の研究室にて、博士課程の学生として研究を行っていました。国際的に著名な古井教授の研究室には、海外の研究者がたびたび訪れ、相互に研究紹介を行い、意見交換する機会が多々ありました。「英語は得意で、何の問題もなく対応できました」と言いたいところですが、実際には、発表後の質疑応答における英語の質問が十分に聞き取れず、幸運にも聞き取れたとしても十分な回答をすることができませんでした。研究者として英語で十分に研究の議論ができるようになりたくて強く願いました。

博士課程の最終学年には、CMUのAlex Waibel教授率いる音声言語の研究室InterACTに2週間滞在し、共同研究を行う機会に恵まれました。研究については問題なく進み、研究成果を論文としてまとめることができましたが、日々のコミュニケーションでは英

語の壁に苦しめられ、もっと経験が必要であることを痛感しました。

博士号取得後、筆者は日本企業の研究所に入所し、国際的な論文誌に論文を発表し、電子情報通信学会から論文賞を受賞し、順調に研究を進めておりました。そんな折、CMUのNational Science Foundation(NFS)の音声翻訳・要約研究プロジェクトと一緒に研究しないかと、Waibel教授から誘われました。計算機工学の最先端であるアメリカで研究することは、国際的に活躍する研究者として経験を積むまたとない機会でした。2004年3月、単身アメリカに飛び立ち、NFSプロジェクトの研究を始めました。

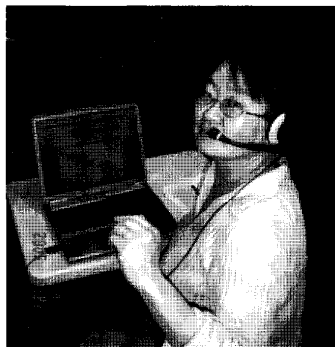


図1 CMUのオフィス内の自作の防音室にて

## 3. ピッツバーグでの生活

ピッツバーグでは、渡米前に住居の手配を済ませていたので、すぐにアパートに入居することができました。これも、ピッツバーグ便利帳というWebサイトとピッツバーグに住む日本人同士の情報交換の場として運営されているpgh-jメーリングリストのお陰です。

CMUに着任すると、まずOffice of

International Education(OIE)でJ1ビザの処理を行い、すぐにソーシャルセキュリティナンバーを取得しました。アメリカでは税金を含めて、公の手続きにはソーシャルセキュリティナンバーが必須です。銀行口座の開設、ケーブルテレビ、インターネット、電話の契約を行い、生活が落ち着くのに2～3週間ほどかかりました。その際、電話での手続きには非常に苦労しました。英語母語話者による電話音声を理解するのは非常に困難で、簡単な手続きであっても長い時間を要しました。電話で不自由なく会話ができるようになったのは、アメリカに暮らし始めて1年以上経ってからでした。

次に、給与、健康保健、退職金に関する手続きを行いました。筆者の給与はCMUから支払われたので、Payroll Officeで手続きをする必要がありました。給与は、週給、月給、小切手または銀行振込みのいずれかで受け取ることができました。小切手を使ったことのなかった筆者は、出納係の言う「銀行振込みで給与を受け取りたいければ、VOIDと書いて小切手を提出して下さい」という内容が理解できず、何度も聞き返してしまいました。

退職金については、401Kで給与から一定額天引きされました。いくつかの投資対象のグループから選択する仕組みでした。研究などというギャンブル性の高い仕事をしている割には、筆者にはギャンブルのセンスがなかったもので、1/3を“high risk but high return”, 1/3を“low risk and thus low return”, 残りは“moderate”に賭けました。今考えますと、これらの

bulk 売りの金融商品の中に subprime mortgage が含まれていてもおかしくないの、“high risk but high return”分は消えてしまったものと思います。

#### 4. CMU における研究

筆者のオフィスは、アメリカ人のバジェットマネージャと共用だったことから、英語しか話さない日々が続きました。事務処理では、何度も聞き返す、何度も執拗にお願いするといった、苦しい日々が続きましたが、人によって異なるさまざまな英語の発音や言い回しを覚え、社会の仕組みを覚え、徐々にアメリカでの生活に慣れていきました。

筆者が最初に手掛けた仕事は、NFS ファンドの新しい研究プロポーザルの作成でした。これまで、アメリカの研究ファンドを得るためのプロポーザルを書いた経験がなかった筆者ですが、同僚に助けられながら何とか仕上げることができました。どのような研究をするのかという議論では、ドイツ人の同僚とホワイトボードの前で何時間も議論しました。時間をかけて互いを理解し、互いに信頼し合いながら、着実に仕事を進めることができました。

2005年には、Defense Advanced Research Projects Agency (DARPA) の GALE (Global Autonomous Language Exploitation) という音声翻訳の研究プロジェクトが新たにスタートしました。アメリカにおける音声研究は国防を目的としたものが多くありましたが、GALEも9.11の影響のもと、アラビア語、中国語の放送音声などから英語で情報収集、分析するための研究プロジェクトでした。CMUもGALEプロジェクトに参加し、筆者は中国語の音声を英語のテキストに翻訳する研究を行いました。

研究プロジェクトでは学生のアルバイトをお願いすることがありましたが、大学が雇用した学生の人種、性別の調査を行うことに驚きました。アメリカでは、人種間、性別間における機会均等を実現するため、非常に努力していることを感じました。

#### 5. 子連れ研究活動

CMUで働き出して4か月が経つ頃、

「今日は特別な研究発表をして欲しい」と頼まれ、発表会場に向かいました。扉を開けると、風船にプレゼントの山、青い靴がデコレートされたケーキ、その周りには研究室の仲間が笑顔で待っていました。サプライズベビーシャワーです！



図2 研究室の仲間とベビーシャワーパーティ

筆者は、配偶者を日本に残し、妊娠5か月で単身渡米しました。当初、何故に慣れ親しんだ環境を置いて外国で一人暮らししているのかと、ひどい孤独に苛まれることがありました。このサプライズパーティは、研究室に自分の居場所ができたことを強く感じさせてくれる一件でした。研究室の仲間とは、国際会議の論文や評価型ワークショップの結果提出の締切りに追われ、夜中まで一緒に研究しました。当時一緒に研究していた仲間は、現在IBM, Microsoft, Googleなどの研究室で活躍しております。彼らと一緒にCMUで過ごした時間は、何物にも代えがたい宝です。

アメリカでは健康保険の制約により、出産後3日くらいで退院させられます。筆者も出産10日後には国際ワークショップを主催するため、生後間もない息子を連れてピッツバーグからオハイオ州クリーブランドまで車で移動しました。母親として十分な知識がない状態での旅行だったため、ミルクとおむつの分量を誤り、見知らぬ土地で店を探して右往左往しました。アメリカでは、妊娠していようが、子連れであろうが、研究したいという本人の意思が尊重され、女性であることも、母親であることも、研究を止める理由にはなりません。子連れ母子の国際会議行脚は、その後も続きました。

#### 6. J2 ビザホルダとして

2006年になると、筆者の配偶者がMITに企業派遣で研究にいくこととなり、ボストンで家族一緒に暮らすこととなりました。これまで自分自身がJ1ビザホルダとして研究してきましたが、今度はその家族としてJ2ビザで滞在することとなりました。ボストンのアパートでは、20世帯以上の日本人が暮らしており、奥さま方と一緒に子育てを楽しむことができました。

MITでは、海外からの研究者や学生の家族向けにMIT Spouse and Partnersという組織があり、職員の方やその奥様方が英会話教室を開いて下さいました。そこでも、さまざまな国から集まった研究者の奥様方と知り合うことができました。育児の大変さに「頭を垂れて、膝を屈する」という心境に至っていた筆者は、海外の慣れない環境で仕事をする夫を支え、自分自身も慣れない環境で育児をしている多くの女性達と知り合い、深い尊敬の念を抱きました。また、MIT Women's Leagueという組織では、日本人女性のグループが、Joy of cooking classを開いて下さいました。この料理教室では、MITの職員や奥様方が自宅で料理を教え、ホームパーティを開いて下さいました。このようなMITの皆様の心遣い、おもてなしには、大変感動致しました。このボストンでの1年間は、研究室という男性社会で生きてきた筆者に“another perspective”を与える有意義なものとなりました。

#### 7. 最後 に

海外での研究経験を通して学んだことは、「志があれば道は開かれ、志が強ければ救いの手が差し伸べられ、素直な気持ちで精進すれば道を進むことができる」ということです。国際的な研究の機会を与えて下さった恩師とアメリカで筆者を支えて下さったすべての皆様に深く感謝致します。また、海外で研究したいという気持ちを理解し、送り出してくれた配偶者に感謝致します。